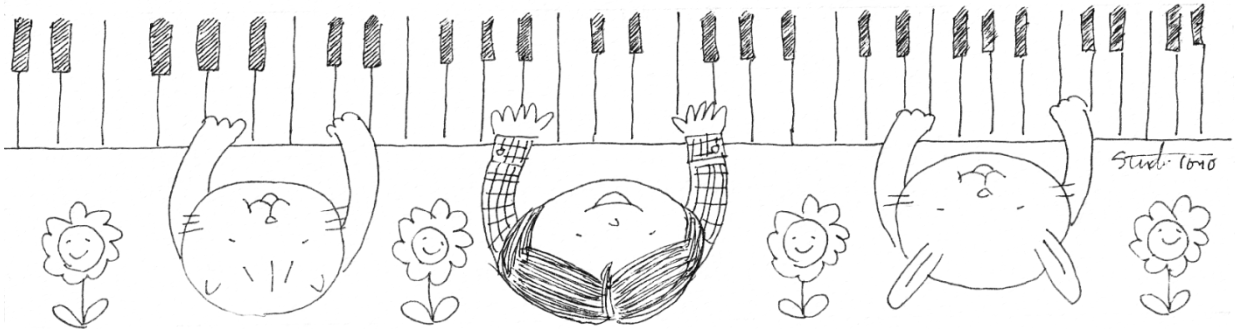


ボランティアグループがつくる和歌山県ジェンダー平等推進センターの書評誌

この本よんだ？

～りいぶる BOOK プラス～



女性と宗教

大越愛子 著 岩波書店 1997年 (A:フェミニズム)



昨年私は高野山で修業して僧侶となって、今年は外国人観光客の「奥の院ナイトツアー」のガイドみたいなことをさせていただいている。ある日いつものように「高野山は弘法大師の昔から明治初年まで女人禁制となっていました」と紹介すると年配の女性から「stupid(ばかな、愚かな)」と大声で叱られた。「いえいえ、妙齢の女性がいらっしやると私も男性の僧侶は修行に集中できませんから、弘法大師がお決めになったのです」と言うと普段は小さな笑いが起こって終わりなのだが、この女性は「stupid」を繰り返すのであった。

この本は冒頭から「宗教は『救済』の理念のもとに、宗教史上女性の果たした役割を葬り去り、逆に隷属させ、虐待してきたのではないかと」厳しい。

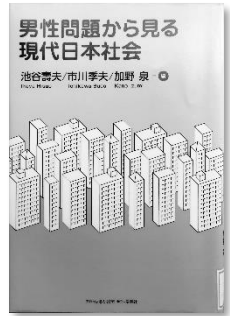
「キリスト教において暴力の犠牲者は誰か」「仏教は非暴力的か」「消去された女性たち(イスラム教)」と世界三大宗教がメッタ切りにされる。現代のカルト的宗教についても同様である。

著者は元近畿大学教授で、内容はかなりアカデミックであり僧侶の私が読んでも難しいが、読者は目次から関心のある項目を見つけて読まれればよい。

私の目を引いたのは魔女についての考察であり、わが国の新宗教における女性教祖についての言及である。この本を読んでから前述の外国人観光客の女性とやり取りすれば「stupid」は回避できたかもしれない。(紀生)

男性問題から見る現代日本社会

池谷壽夫 市川季夫 加野泉 編 はるか書房 2016年 (A:フェミニズム)



「妻はなぜ、夫のがんばりを認められないのか」。そう思っている男性は多いのではないだろうか。これは、本書第5章のタイトルである。夫と妻の意識の違いに着目した分析に「なるほど」と納得した。本書は6人の執筆者によって構成され、他の章では「男性相談に寄せられた内容」や「ひきこもり問題」、「男性のセクシュアリティの危機」といった面から男性問題が綴られている。

ジェンダーの問題といった時、男性の優位性や加害性ばかりが強調されて、男性は肩身の狭い思いをすることが多い。しかし、それでは一面的だと本書は言う。男性が優遇されているということに気づいた上で、優遇ゆえに男性が失っているものがあることも見据えていく必要がある、と述べる。『ジェンダーの規範は多様な個性と対立し、人びとの「生きづらさ」を生み出し続けている』というあとがきの言葉が印象に残った。(0.S)

弘兼流 60歳からの手ぶら人生

弘兼憲史 著 海竜社 2016年 (K:エッセイ・文学)



手ぶらで歩いていくのは何と楽なことが。著者は持ち物を半分にし、人生を身軽に生きていこうと言っている。

主な内容は、▶時間と共に必要な物は変わっていく。▶アンチエイジングは無駄。老いるのは自然なこと。▶抵抗していられぬパワーやお金を使ってもしょうがない。いかに老いを受け入れるか。▶テレビに振り回されない。観たい番組以外はつけない。▶友達の多さで幸せは決まらない。本当に信頼できる友が少しいればよい。▶自分は自分だと思い堂々と生きる。他人と比べることほど、くだらないことはない。▶お金を増やそうとしすぎるから損をする。▶子や孫にお金は残さない。▶どんなふうにも生きても1時間は1時間。一生は一生。時間は誰にとっても平等。時間をどう生きるか。などである。

他にも身軽に生きるヒントが満載。あなたにできることから始めてみませんか。(はんちゃん)

男装の天才琵琶師 鶴田錦史の生涯

佐宮圭 著 朝日新聞出版 2024年 (J:自伝・評伝)



表紙に二人の琵琶師の写真が載っている。どう見ても男性と女性で別人にしか見えないが、題名に「男装の」とあるのでこれが同一人物かと半信半疑でページをめくった。

小学生の時から弟子を集めた天才少女は20代で女であることを捨て、子どもを手離し、音楽とも別れて実業界に転身、男として生きる道を選んだが武満徹との出会いを機に音楽界に復帰した。彼女が鶴田錦史で、これはその壮絶な人生を追った伝記である。

鶴田は小澤征爾指揮、武満徹作曲「ノーヴェンバー・ステップス」の琵琶ソリストとしてニューヨークでの初演に挑み、一夜にして世界的な名声を手に入れた。世界の巨匠バーンスタインも「魔術を見せられているようであれほど興奮したことはない」とニューヨーク・タイムズで絶賛している。

「波乱万丈」とか「激動の」というのはこういう人生をいうのだらうと思うほど次から次へと難題がふりかかるが、それに負けずに生きた彼女に勇気をもらえた。

小学館ノンフィクション大賞優秀賞受賞作である。

(花賀)

お探し物は図書室まで

青山美智子 著 ポプラ社 2020年 (K:エッセイ・文学)

「何をお探し？」

不思議な安心感のある優しい声に体を包まれる。ここは地域のコミュニティハウスの中にある図書室のレファレンスカウンター。声の主は見た目のインパクト強めの司書『小町さゆり』。

五つの物語の主人公は、二十一歳の婦人服販売員や三十歳のニート、六十五歳の定年退職者など、それぞれに小さな行き詰まりを感じ、レファレンスカウンターへ導かれていく。小町が選書しプリントアウトしてくれた紙の最後の行には、なんか関係なさそうな本のタイトルが。そして、付録と言って羊毛フェルトのマスコットをくれるのだった。

紹介された本に引き寄せられているのか、自分の力で切り開いていったのか、はたまた羊毛フェルトのマスコットのおかげなのか。そこから五人の主人公たちは探しているものに気づき、人生が少しずつ動いて行く。

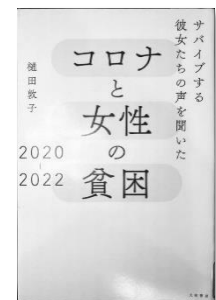
読み進めて行くと、この章の主人公はあの章にチラリと出ていたあの人では？とページをめくり直す楽しみも！私はみづえ先生の『メリーゴーランド』のエピソードが好き。(み)



コロナと女性の貧困 2020-2022 サバイブする彼女たちの声を聞いた

樋田敦子 著 大和書房 2022年 (A:フェミニズム)

本書は、2020年から2022年までのコロナ禍で起きた出来事を時系列に紹介しながら、その中で生きる女性たちに焦点を当てています。コロナは多くの女性の雇用や生活を直撃しました。本書を読むことで、コロナ禍で特に女性が貧困に陥った理由が見えてきます。そのひとつは、非正規雇用で働く女性が多いことです。さらに、コロナの影響をともに受けた飲食・宿泊業で、非正規雇用で働く女性が多かったことは、大きな打撃となりました。また、休校・テレワークの増加で、家事・育児の負担が増し、勤務の継続が難しくなった女性が多いことも挙げられます。家事・育児の多くを女性が担っているという現状を是正していく必要があります。これらの問題は、自力で解消しようにも限界があるものだと思います。必要な人に必要な援助が行き渡るような社会に変わっていかねばならないと思いました。(A.T.)



常識のない喫茶店

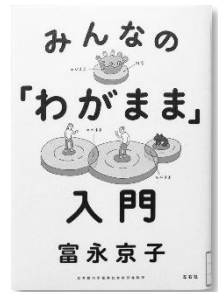
僕のマリ 著 柏書房 2021年 (K:エッセイ・文学)

「働いている人に失礼な態度をとる人はお客様ではない」という理念の喫茶店で働く著者が書くお仕事エッセイ。いいお客さんもいれば、理不尽なお客さんもいる。失礼な客は容赦なく「出禁」。「こっちは客だぞ」に対し、「こっちは人間だ」で応酬するなど、接客経験があれば胸がスッキリするような内容。間違っていることを間違っていると言えない弱さ、どんな相手でも対等であること、嫌な気持ちに素直になること。いくら仕事でも理不尽なことを見て見ぬふりするのではなく、きちんと対応してくれる。そんな場所が増えたら良いな。(めい)



みんなの「わがまま」入門

富永京子 著 左右社 2019年 (E:こころ・癒し)



去年は選挙が多い年であり、「年収103万円の壁」問題など制度を揺るがす事が多く議論されていました。

本書は「社会運動」って何？ということ、を、分かりやすく中高生向けに話した内容を記したものです。

「社会運動」というと暴力的でアレルギーを示す方もいますが、本書では「不平不満を社会に訴えて、人の意識のあり方やルール、制度を変えようとする行動」としています。例えば、公害、フェミニズム、環境、障害者、外国人など多様な問題で考えられます。活動方法として、デモ、署名、シンポジウム、学習会などがあります。また、もやもやを言語化し、雑誌、新聞、HPをつくる活動も含まれるそうです。

個人の「わがまま」は自己中、クレーマーなのだろうか？何が普通かと考えることによって見方は変わるそうです。

(か)

彼岸花が咲く島

李琴峰 著 文藝春秋 2021年 (K:エッセイ・文学)

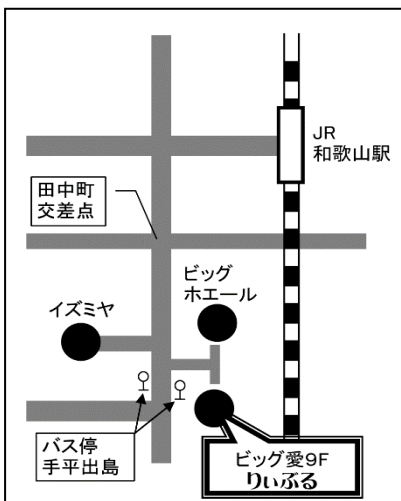


<島>に流れ着いた少女(宇実)を<島>で生まれ育った少女(游娜[ヨナ])が助けたところから物語が始まります。<島>は過去にあった悲しい歴史のために、特別な資格を得た“ノロ”と名乗る女性達が<島>の生活を支えています。この歴史は女性である“ノロ”だけが知ることが出来ます。游娜は“ノロ”になるために学んでいます。宇実はよそ者のため、“ノロ”になるための厳しい試験を通過しなければ<島>から出ていくように“ノロ”を取り仕切る“大ノロ”に言い渡されます。游娜の幼馴染の少年(拓慈)は“ノロ”になって、<島>の歴史を知りたいと強く思っています。この3人を軸に<島>を通して理想とされる人間関係や生活様式、家族のあり方や生き方が描かれています。

<島>を取り仕切る“大ノロ”は命をかけて<島>を守り通して逝去します。無事“ノロ”になることが出来た宇実と游娜は、“大ノロ”が「<島>以外の場所は今でも戦争を繰り返しており、いつく島>が巻き込まれるか分からない」と言ったことをきっかけに<島>の歴史を伝えるために、男性も“ノロ”になれるようにすべきだと考えます。

<島>の歴史や生活様式を大切にしながら、未来のことを考える若い“ノロ”の2人を通して、今の生活を大切にしつつ、少し先の未来を考えることの大切さを感じました。

(Ma)



この本 よんだ? 第30号 (2025年3月発行)

◇企画・発行 りいぶるぶらす

◇協力 和歌山県ジェンダー平等推進センター“りいぶる”

【編集後記】

コロナの間控えていた食事交流会を新年に行いました。2013年からのメンバーは減り、新しい人も増えました。ここに参加しないと決して会うことはなかった人達と話しているのは不思議な感じがします。

30号になりました。

★あなたも書評を書いてみませんか？ボランティアスタッフ募集。メールでお問い合わせください。 E-mail libreplus@yahoo.co.jp